

会員の声

スプライト論争を読んで

佐藤 健

スプライトは「高層大気中の電磁気現象で、天文学ではなく気象学の分野に属する。(中略) スプライトの研究は気象学会や地学教育学会の会誌に投稿するのが筋で、本研究会の会誌『天文教育』にはふさわしくない」との佐藤明達氏のご意見があった[1]。また同氏は故宮本正太郎花山天文台長の火星気象学や月惑星地質学地形学の研究を引用して、「これらはいずれも orthodox な天文学であり、heterodox ではない。要は、研究対象は何かということである」と述べておられる[2]。このうち[1]を受けて、何人かの方が意見を述べておられた[3][4][5][6]。

ところで、私がスプライトについて知ったのは天文雑誌によってである。私たち天文家は、空に見えるものについて、たとえそれが天文学的な現象でなくても答えを求められることがあるが、天文雑誌が「スプライトは天文現象ではない」として取り上げてくれなかったら、私はそれについて今も知らなかった可能性が高い。天文雑誌がスプライトを対象外として排除しなかったことは、私にとって有り難いことだった。

次に、研究対象と発表媒体の関係であるが、例えば、アメリカ地球物理学連合 (American Geophysical Union) の機関誌 "Journal of Geophysical Research" には地球以外の惑星や衛星に関する記事がたくさん載っている。というより、この雑誌が惑星探査機の成果を発表する場の最大のものひとつになっている。これをまねろと言うわけではないが、あまりジャンルや対象にこだわると、悪名高い縦割り行政と同じような弊害が生じるのではないだろうか。

参考文献

- [1] 佐藤明達, 2005, スプライトはどこに発表すべきか? 『天文教育』 Vol.1.17, No.6, p.49
- [2] 佐藤明達, 2006, スプライトはどこに発表すべきか (続き) 『天文教育』 Vol.1.18, No.3, p.51
- [3] 矢治健太郎, 2006, どこまでが天文教育か? 『天文教育』 Vol.18, No.1, p.33
- [4] 仲野誠, 2006, 天文学の地平は広い 『天文教育』 Vol.18, No.2, p.57
- [5] 山根弘也他, 2006, スプライトはどこに発表すべきかを読んで 『天文教育』 Vol.18, No.2, p.59
- [6] 西村昌能, 2006, 会員の声を読んで 『天文教育』 Vol.18, No.2, p.61